

第61回愛知県総合教育センター研究発表会
テーマ「資質・能力の育成を目指した学びの在り方」
令和3年11月26日（金） 愛知県総合教育センター

第61回愛知県総合教育センター研究発表会を、「資質・能力の育成を目指した学びの在り方」というテーマの下開催した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、当日はZoomを用いたオンライン開催、令和3年12月9日から令和4年1月6日までは、オンデマンドによる動画配信を行った。オンライン開催には約350名の参加者、オンデマンド動画の視聴回数は、延べ570回となった。以下にこれらの概要を紹介する。

1 開会行事次第

- ・開会のことば
- ・所長挨拶
- ・基調提案
- ・閉会のことば

2 講演

- ◆演題 「『資質・能力』を育成する評価の在り方—パフォーマンス評価をどう活用するか—」
- ◆講師 京都大学大学院教育学研究科教授
西岡 加名恵 氏

3 研究発表・研究協議

次の各研究についてオンラインによる発表と協議を行った。なお、各研究の詳しい内容については、当センターウェブページ「研究紀要第111集（令和4年4月1日掲載予定）」参照。

◇第1部会（小中高特）

新学習指導要領を踏まえた学習評価の在り方に関する研究（中間報告）

【発表・協議の概要】

「新学習指導要領を踏まえた学習評価の在り方に関する研究」について、基調提案と研究協力校7校のうち4校の実践発表、校種に分かれての意見交流を行った。

基調提案では、新学習指導要領における学習評価の基本的な考え方を確認した。教師の授業改善と児童生徒の学習改善につなげるため、「効果的な指導と評価の一体化の方法」「主体的に学習に取り組む態度に焦点を当てた児童生徒を見取るための視点や方策」の2点を探る研究の目的を確認して、研究の方法や内容について説明をした。

実践発表では、研究の方法である「授業マネジメントシートの作成・活用」と「効果的な振り返り」を探るための各校の取組を発表した。

校種ごとの意見交流では、「判断基準を作成する必要性」「教師間の共通理解」「主体的な姿と知識・技能の習得の関係」などが話題として挙がった。それぞれの学校で、新学習指導要領を踏まえた学習評価について検討している状況が確認できた。

◇第2部会（高特）

EdTechによる『未来の教室』創造に関する研究

【発表・協議の概要】

「EdTechによる『未来の教室』創造に関する研究」について、概要説明と研究協力校代表委員3名による研究発表を行った。生徒1人1台の情報通信端末を使用した学習指導等について実践し、その成果及び課題の検証について報告した。

研究協議では、3人の代表委員と参加者で、情報機器端末を児童生徒がどのような学習場面で利用できるか集約した「利用状況集約表」を用いて、各校の利用状況について、情報共有を行った。新型コロナウイルス感染症対策として、オンデマンド動画配信は行ったが、それ以降学校として取り組むために模索中である学校や、特定の学年・特定の教科（1年英語）からロイロノート・スクールを使い始めたという学校、職員会議をTeams上で行う学校もあった。

◇第3部会（小中高特）

いじめの組織的な未然防止に関する研究

【発表・協議の概要】

「いじめの組織的な未然防止に関する研究」について、基調提案と事例ワーク体験、研究協力委員4名の研究発表を行った。

基調提案では、いじめに対する「未然防止」と「組織的」な取組について、その意義や目的、研究の概要と実践内容について報告をした。事例ワーク体験では、「いじめへの対応力を高める校内研修」の模擬体験を実施した。事例に対するそれぞれの考えを、会場にいる研究協力委員から求めるだけでなく、Zoomによる参加者からもチャット機能を用いて募り、事例ワークを行った。研究発表では小学校1校、中学校1校、高等学校2校における「いじめへの対応力を高める校内研修」の実践報告を行った。

感想交流では、「みんなで考えることで、いろいろな視点をもつことができ、自分一人では思いつかないアイデアが短時間で集まり、教員間の連帯意識をもつことができると思った」「フローチャートやそれについての解釈の表など、組織で同一歩調で事例にあたっていく上での指針が得られ、とても有意義な体験だった」という意見が多数寄せられた。

◇第4部会（高特）

県立高等学校教育課程課題研究（数学）

【発表・協議の概要】

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、「授業改善を図るための授業研究の進め方」「身に付けさせたい資質・能力を育むための観点別学習状況の評価の進め方」「思考力、判断力、表現力等の育成を目指したICTの活用方法」について、実践に基づいた研究成果を報告した。

研究協議では、観点別学習状況の評価、ICT活用の2点をテーマに、各校の実態と課題について共有した。「やらなければならないことは分かっているが、何から手をつけてよいか分からない」という先生が多くいることが分かった。教員間の温度差も大きいということから、教員全員の意識改革を図り、学校全体で取り組むという意識をもっていただけるよう、支援が必要であると感じた。

◇第5部会（高特）

県立高等学校教育課程課題研究（英語）

【発表・協議の概要】

「県立高等学校教育課程課題研究（英語）」では研究発表及び研究協議を行った。研究の趣旨説明に続き、研究員6名が「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の3領域について、パフォーマンステストとそれを評価するためのルーブリックに関する実践発表を行った。

目標や指導事項に基づく単元指導計画、主体的・対話的で深い学びの工夫、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点による評価を通して、具体的な指導例や評価方法を提案し、生徒の変容や実践の成果と課題について、ルーブリックによる評価の検証結果を踏まえて報告した。

研究発表や研究協議を通して、生徒のパフォーマンスを観点別に見取るためにはどのようなパフォーマンステストを実施するとよいか、また、どのようなルーブリックを作成するとよいか具体的に分かった。各学校でのパフォーマンステストに対する理解を深め、効果的な実施に向けて取り組んでいきたいという意見もあり、参加者にとっても有意義な時間であった。

◇第6部会（高特）

県立高等学校教育課程課題研究（産業教育（農業、水産））

【発表の概要】

「ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを実現する農業、水産科目の授業改善」について5名の研究員が授業実践したことについて発表した。各研究員は産業教育の農業科、水産科におけるこれまでの研究成果を基に、農業、水産の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通じた指導方法について模索した。既存の施設や設備を有効活用しながら、授業や実験・実習の学びの在り方について分析し、ICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善について取り組み、授業実践の分析と効果的な指導方法について理解を深めた。

県立高等学校教育課程課題研究（産業教育（工業））

【発表の概要】

「新学習指導要領の趣旨を踏まえた、工業科における実践的・体験的な学習活動を通じたものづくり教育における指導方法」について、研究員5名が各校で取り組んだ特色あるものづくりの研究成果を発表した。研究員による研究発表においては、①空気圧制御機器を使用したものづくりを行い、生徒の気持ちの変容について ②3Dプリンタを使用して、新たな発想でいろいろな作品を製作する中で生徒のやる気を高める取組 ③ロボットシステム開発を通じた主体的・対話的で深い学びの研究 ④空気圧制御機器と車を融合したものづくりを通して、生徒にやる気と自信をもたせる取組 ⑤モデルベース開発(MBD)教育の実践と評価方法について が発表され、ものづくりを通じた各学校の発表となった。

4 教育相談特別研修論文の内容紹介ビデオについて

○愛知県立守山高等学校 橋本 忍 教諭

テーマ 「『生徒の成長』を促す教育相談的機能を意識した生徒指導の在り方ー教師の同僚性と協働性に着目してー」

生徒指導とは生徒理解・信頼関係・自己開示のサイクルであり、これらの要素を深化させる役割を果たすのが教育相談の機能であることが生徒指導提要や先行研究などから分かった。また、現代の社会情勢の中で一人一人の生徒に適した対応をするためには同僚性と協働性が必要であり、重要であることが分かった。

その結果、同僚性と協働性を土台とし、教育相談的機能を基本とした生徒指導を行うことが「生徒の成長」につながることを、事例を通して考察した。

○愛知県立半田商業高等学校 久綱 千賀子 教諭

テーマ 「性の多様性に配慮した学校体制づくりに踏み出すためにー教員の意識調査からー」

近年、性の多様性やLGBTsについて知られるようになってきたが、学校では多様性に配慮した体制が十分に整っておらず、対応や配慮に不安や戸惑いをもつ教員も多い。そこで体制づくりに踏み出すために、教員が多様性やLGBTsに関する意識や考え方、学校体制づくりについて質問紙とインタビューによる調査を行った。結果、多くの教員が無関心なのではなく、思いがあることが把握できた。分析の結果、教員が自分事として問題意識をもつことと、互いの考えや不安を共有する場をもつことが体制づくりへ踏み出す鍵となることが分かった。

○愛知県立小坂井高等学校 柴田 沙樹 教諭

テーマ 「インターネット依存予防教育の手だての考察ー依存の程度の自覚と自律的利用を目指してー」

高校生を対象に、インターネットの利用実態を尋ねる質問紙調査を実施した。因子分析の結果、依存傾向と背景要因についてそれぞれ5因子が抽出された。また、分散分析の結果、「インターネット利用時間の長さ」と「優先・ながら利用」依存傾向因子の組み合わせは、生徒の「充実感」と互いに影響し合うことが分かった。そして、これらの調査結果を反映したリーフレットを作成し、生徒にインター

ネット依存の程度の自覚と自律的利用を促し、インターネット依存予防教育の一助となることを目指した。